

[研究区分： 科研費獲得支援]

研究テーマ： 女性研究者のライフスタイルに関する研究 —猿橋賞受賞者の事例を中心に—	
研究代表者： 総合教育センター 講師・木本 尚美	連絡先： kimoto@pu-hiroshima.ac.jp
共同研究者：	
【研究概要】 本研究は、自然科学の領域で功績をあげた女性に授与される猿橋賞歴代受賞者 32 名 ¹ のキャリア形成及びライフスタイルを明らかにすることにより、女性研究者の展望を図ることが目的である。事例から、研究者としての動機づけの時期や研究活動の阻害要因及び促進要因を明らかにすることができた。また、条件に恵まれた研究者は優れた業績を挙げることで、さらに好条件に恵まれるという優位性の累積効果 ² のあることが判明した。	

【研究内容・成果】

1 受賞者の経歴と報賞の関係性

歴代受賞者の出身大学を表 1 に示した。21 名（65.6%）が旧帝大出身者であった。設立起源を戦前に持つお茶の水女子大学や日本女子大学出身者を含めると比率は 84.4% となり、研究に対する報賞と大学の伝統の間に何らかの相関のあることが推察される。表 2 に取得学位を示した。この中には博士研究員として留学先の大学で取得した者、一人が複数の学位を取得した者、出身大学ではなく進学先の大学で取得した者も含まれている。取得学位の第一位は理学（60.6%）であった。また、受賞時の所属機関（表 3）を比較すると、旧帝大が 37.5%、国立大が 18.8%、私立大と研究施設が各 21.9% であった。やはり旧帝大の寡占がめだつた。研究職として位置づけられるような就職ができるか否かは重要なポイントであるが、彼女たちは必ずしも初職から恵まれていたわけではない。うち 2 名は大学の教務職員からスタートしている。その他、助手経験者 10 年以上が 7 名、10 年未満 11 名、初職を得る前に留学先で TA や RA を経験した者が 14 名、いわゆる二次研究者的職種を長期間経験した者、大学院修了後財団法人や民間企業の研究員を経た者もいた。表 4 は猿橋賞受賞後に授与された主な報賞を示している。同一人物が複数の賞を獲得したものも含まれている。特筆すべきは、猿橋賞が契機となり国家レベルの学術的報賞に発展したケースの存在である。いわば、科学エリートが第一級の研究をする際に大きな便益をもたらす人的、物的資源への接近、あるいは利用の面で少なからず優位に立つという優位性の累積効果があることがわかる。では、彼女たちの並みはずれた努力や業績を支えたのは何であろうか。学校教育・教師、家族・親類・近所の人、友人、書物やマスコミなどは、彼女たちの将来にどのような影響を与えたであろうか。キャリア形成の初期の段階からみてみたい。

2 キャリア形成を阻害する要因

学校教育や教師から研究者になることを阻害されたと感じた者は決して少なくない。特に高校、大学、大学院時代と年齢が進むにつれて不快な思いや経験をした者は、そうしたステレオタイプによる障害を人並み以上の好奇心や興味・関心で克服し、場合によっては無視してきた。初期のキャリア形成段階で、結婚はハードルにはならなかったが子育て期間中は大変だったと振り返る者は多く、母親の支援によって切り抜けたものの、海外留学時にやむなく子どもと離れることで味わった心の葛藤など、女性であることの大変さを経験した例もあった。

3 キャリア形成を促進する要因

¹ 「女性科学者に明るい未来をの会」（1980 年創立）が自然科学の分野で、顕著な研究業績をあげた 50 歳未満の女性科学者に贈る学術賞で、猿橋勝子博士によって創設された。多くの自然科学分野の学会から推薦された候補者の中から毎年 1 名に与えられている。2012 年（第 32 回）までを対象とし、アンケート調査と主として二次資料に基づき検討した。

² H・ズッカーマン（金子努監訳）『科学エリート—ノーベル賞受賞者の社会学的考察—』玉川大学出版部，1980。

一方、書物やマスコミから励まされたとする意見もあった。幼少時から読書を好み、伝記や科学関連書物に触れることで研究職の存在を知り、憧れたケースなど。もっとも、実際は同時に様々な人から励まされたり、意欲を阻害されたりしながらキャリア形成をしていったというのが実状と思われる。ただ、少なくとも本ケースの場合は動機づけの時期が比較的早く、重要な局面で良き指導者（多くは男性）と出会い、研究をあきらめなかった点で一致していた。女性研究者をさらに増やすためには、学校現場や大学院教育の中での、女性の目線に沿った環境改善が求められる。

4 研究活動を阻害する要因

現時点で研究活動を阻害している要因として、研究時間が十分に取れない、研究と関係ない雑用が多い、研究を補助してくれる人がいない、の3点を指摘する者が多かった。研究費については阻害要因とは見なされていない。研究助成費に窮するよりもむしろ、時間と動力不足の方が切実とされている。もっともこの3点に関しては女性特有というものではなく、男性研究者も同様に感じる要因と思われる。女性独特の阻害要因としては、職場の人間関係、研究情報が十分に得られない、組織内の人事が公平でない、子どもの教育、親の介護などが挙げられた。配偶者の支援や協力の姿勢も問われている。

5 研究活動を促進する要因

海外研修（留学）制度や国際会議での発表など、他流試合による緊張と競争が研究成果につながると同時に、キャリア形成期にも確認された人間的側面、すなわち良い指導者、研究者相互の交流、職場の雰囲気などが挙げられた。彼女たちには若手研究者への良き指導者となることが期待されている。

6 成果

受賞者たちは、キャリア形成の初期段階を乗り越えて研究職に就くと、その後女性という理由で多少の不利益を被ったにせよ、結果的に研究成果が認知されることにより、職業的地位にまさる社会的成功を修めるに至った。そのプロセスには優位性の累積効果が見られた。そして現在は、男女共同参画社会における研究環境改善のためのアクションを、高等教育機関等で繰り広げるリーダーとしても活躍している。また、猿橋賞受賞者のキャリア形成には、いわゆる大学の歴史と伝統が深く影響していることが明らかになった。

表1 出身大学

	大学名	人数
旧帝大	東京大学	12
	京都大学	4
	東北大学	2
	名古屋大学	2
	北海道大学	1
国立大学	お茶の水女子大学	5
	東京工業大学	1
	神戸大学	1
私立大学	日本女子大学	1
	東京医科大学	1
公立大学	東京都立大学	1
	横浜市立大学	1
	合計	32

表2 取得学位

学位名	人数
理学	20
医学	5
工学	3
農学	2
薬学	1
Ph.D	2
合計	33

表3 所属機関(受賞時)

	大学名	人数
旧帝大	東京大学	8
	名古屋大学	2
	東北大学	1
	北海道大学	1
	東京工業大学	1
国立大学	東京学芸大学	1
	筑波大学	1
	千葉大学	1
	奈良先端科学技術大学院大学	1
	岡山大学	1
	慶応大学	2
	日本女子大学	1
	東京医科大学	1
	東京薬科大学	1
	関西学院大学	1
京都産業大学	1	
	研究施設	7
	合計	32

表4 受賞後に授与された報賞

紫綬褒章
瑞宝中綬章
日本学士院賞
文化功労者
スウェーデン王立科学アカデミー外国人会員(化学部門)
文部科学大臣表彰(研究部門)
科学技術庁長官賞(研究功績者)
日本数学会代数学賞
日本化学会賞
日本動物学会賞
日本医真菌学会賞
日本表面科学会賞
日本消化吸収学会功労賞
有機合成化学協会賞
時実利彦記念賞
井上學術賞
山崎貞一賞
三井化学触媒科学賞
持田医学薬学振興財団学術賞
上原記念生命科学財団 研究助成賞
日本女性科学者の会・功労賞
世界化学年女性化学賞
ロレアル・ユネスコ女性科学賞
エイボン女性大賞